

---

# 男の子は魔法使い

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

男の子は魔法使い

### 【Nコード】

N8957P

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

学校の事務員香里奈はとても地味な外見である。だが教育実習に来た裕則のそのメイクによって。あるドラマがヒントになった作品です。

## 第一章

男の子は魔法使い

三島香里奈は地味な外見をしている。

職業は学校の事務員だ。いつも職員室の端で静かに仕事をしている。黒淵眼鏡に地味な色のスーツにズボン、黒い髪を後ろで束ねている。そんな女だ。

そんな彼女だから声はかけてもらえない。いつも空気のような存在だった。

「あれ、三島さん」

「三島さんいますか？」

「はい」

いつもそう声をかけられてから応える。

「何ですか？」

「あの、今日ですけど」

「飲み会なんですけれど」

「行きますか？」

「すみません、お酒は」

下戸である。飲めないのだ。

「ですから」

「そうですね。だったら」

「そういうことで」

周りもこれで終わらせる。とにかく地味な彼女は職員室で最も目立たない存在であった。そんな彼女だから学校の生徒達からも忘れられていた。

「うちの学校の事務員さんってさ」

「三人いるよな」

「けれど二人しか見当たらないよな」

「そっだよな」

彼女のことは忘れられるのだった。

「ええと、川端さんに横光さん？」

「あと一人誰だ？」

「誰かいたか？」

生徒達もこんな感じだった。

学校であれば教師がいる。もつとも香里奈は教師達からもあまり  
というか殆ど声をかけられなかった。そんな存在であり続けていた。  
だが学校である。教師になる為の教育実習生も来る。それも毎年  
である。当然今年も来た。その中に一人の男がいた。

前橋裕則という。茶色の髪に大きな二重の目といつも笑っている  
口元の明るい顔の青年である。何でもこの学校の卒業生らしい。

「いやあ、久し振りですね」

「帰って来るとは思わなかったよ」

学年主任である髪の毛の薄い先生が彼に対して言っていた。

「本当にね」

「戻って来て欲しくなかったですか」

「そういう教師はいないよ」

「いませんか」

「生徒が学校に戻って来てくれて嬉しくない教師はね」

「つまり巣立った鳩が戻って来たんですね」

「鳩かな」

「違いますか？」

「カツコウじゃないのかい？」

先生は彼はそれだというのだ。

「君は」

「いやいや。鳩ですよ」

「そうかな」

「平和を愛する鳩ですよ」

「鳩は鳩でも鳩山由紀夫じゃないよね」

ここで先生はわざと嫌そうな顔を試みせた。

「ああした人間にはならないようにね」  
「まああれはどうにもなりませんからね」  
「そうだよ。まあとにかくだけれど」  
「はい」  
「今アルバイトもしているんだって？」  
「今は実習で休んでますけれどね」  
裕則はこう述べて笑ってみせた。  
「流石に」  
「それで何のアルバイトをしているのかな」  
「メイクアップアーティストです」  
彼は笑ったまま先生にまた話す。  
「それです」  
「何だ、メイクかい」  
「顔にそれに髪型にファッションに」  
笑顔はそのままですらに話すのであった。  
「そういうのをしています」  
「つまり全部だね」  
「はい、全部です」  
また言う彼だった。  
「それが今の僕のアルバイトです」  
「何か変わったアルバイトだね」  
「そうですね？けれど自信はありますよ」  
「そこまであるんだ」  
「はい、あります」  
そうしてであった。実際にスーツのポケットからあるものを出したのであった。それは簡単な化粧道具だった。先生にそれを見せたのだ。

## 第二章

「これです」

「それを使うのかい？」

「そうです。これを全て使ってます」

「うん」

「それでどんな女の人も即座にです」

「美人にするんだね」

「あれですよ。女の人は皆原石ですよ」

ここであった。裕則の顔が真面目なものになった。

「皆ですよ」

「皆かい」

「はい、ダイヤかアメジストかはそれぞれですが」

その原石の話もするのだった。

「ですが誰もが原石です」

「誰もがね」

「そしてです」

彼はさらに話す。

「その原石を宝石にするのが僕なんです」

「何か教師よりそっちの方が向いてそうな話だね」

「そうかも知れませぬ。ですが教員免許は手に入れておきたいので」

「現金だね」

「そうですね。これ位普通ですよ」

「相変わらず口は減らないな」

先生はそんな彼の話を聞いてた。思わず苦笑いになった。

「君の担任をされていて大変だったよ」

「それはまたどうも」

「どうもじゃないよ。しかしメイクアップアーティストね」

「はい」

「また面白い仕事だね」

「先生もどうですか？」

彼は軽い表情になつて先生に対して言った。

「男の人も受け持っていますけれど」

「ああ、それはいいよ」

先生は右手を横に振つてそれはいいとした。

「別にね。いいよ」

「いいんですか」

「そうだよ、それはいいよ」

そしてまた言うのだった。

「それで髪の毛が増えるわけでもないしね」

「ああ、髪の毛はですね」

「髪の毛は？」

「頭の洗い方一つで変わりますよ」

こう話すのだった。

「最初熱いお湯で脂と汚れを洗い落としてそれからマッサージする

みたいに洗つて最後には冷たい水で頭皮を引き締めるんですよ」

「それで変わるのかい」

「変わります。あとじっくりと拭いて濡らさせないこと」

「成程ね」

「先生位の髪だとそれで随分と変わりますよ」

「そうか。じゃあやってみるよ」

「はい」

裕則はその先生に笑顔で述べた。そしてであった。

職員室に入る時にだ。香里奈と擦れ違つたのだった。

「おや？」

「どうしたんだい？」

「さっきの人は」

「ああ、三島さんだね」

先生は裕則に彼女の名前を教えた。

「事務員のね」

「僕が学校にいた時はいなかったですね」

「この学校に来て三年かな」

「三年ですか」

「それ位になるね」

こう裕則に話す。

「もうね」

「そうですね」

「いや、三年もいても」

「三年いても？」

「全然目立たない人なんだよ」

この先生も彼女をこう見ているのだった。

「どうにもこうにもね」

「全然なんですか」

「外見が地味だからね」

「ああ、外見がですか」

「そう思うだろ？君も」

「いえ、どうですかね」

しかしここで、であった。裕則は首を傾げさせてこう先生に返したのだった。そして先生に対してあらためてこう言ったのであった。

### 第三章

「それは」

「それは？」

「女の人はすぐに変わりますよ」

彼はにこりと笑って先生に話す。

「もうすぐだね」

「すぐにか」

「はい、すぐにですよ」

また言う彼だった。

「変わりますから」

「じゃあ君が変えられるかい？」

「勿論ですよ」

裕則は先生の問いに笑って返す。

「もうすぐに」

「まさかとは思うが」

「じゃあやっつて御覧に入れますけれど」

「そういうところも相変わらずだな」

ここで少し呆れた顔になる先生だった。

「本当に。すぐ調子に乗って大きなことを言う」

「夢は大きくじゃないですか」

「君のはホラだよ」

「嘘じゃないからいいじゃないですか」

「ホラはホラでよくないんだがな」

「けれど今回はホラじゃないですよ」

ここであった。裕則はこうも言ってみせたのだった。

「実際あの人凄い原石ですよ」

「凄いのかい？」

「あんな原石は滅多にいませんよ」

言葉は真剣なものになっていた。

「いや、本当に」

「そうかね。私はそうは思わないが」

「それもわかりますよ。それでお名前は」

「三島さんだよ。三島香里奈さん」

「三島さんですね。わかりました」

「それで本当に凄いのかい？三島さんは」

先生は職員室に彼を案内して入れながらだ。彼に問い続けていた。

「あの人は」

「凄いですよ。まあすぐにわかりますよ」

「すぐにかい」

「あの人クラスになると本当にちよつとで凄く変わりますね」

「ここでも真顔で話す裕則だった。」

「さて、それじゃあですね」

「まあそれもいいがね」

先生の話がふと変わった。

「いいかな」

「はい、何でしょうか」

「職員室に入ったし教育実習の話をしようか」

そちらにだというのである。

「それでいいかな」

「わかりました。それじゃあですね」

「うん、まず君の受け持ちは二年生でね」

「二年生ですか」

そこから話してだった。彼の教育実習生としての生活がはじまった。彼はそれはそつなくこなしていた。一日目であるがそれでも見事なものだった。

しかしである。二日目だ。彼はすぐに香里奈のところに来てだ。いきなり声をかけたのである。

「三島さんですよね」

「はい？」

「ちよつといいですか？」

明るい声で彼女に話す。

「目をつぶって欲しいんですけど」

「目をですか」

「はい、目をです」

笑顔も明るい。それで彼女にさらに話すのだった。

「つぶって欲しいんですけど」

「どうしてですか？」

「実は僕魔法使いなんですよ」

香里奈に笑って述べる。

「ですから魔法をかけたいと思ひまして」

「魔法を？」

「はい、魔法をです」

笑ってまた述べた。

「すぐに済みますから」

「すぐにですか」

「はい、すぐにです」

また言う彼だった。

## 第四章

「それでどうでしょうか」

「すぐに終わるのですか」

香里奈は黒眼鏡の奥のその目をいぶかしむものにさせて述べた。

「そうなのですか」

「はい、本当にすぐですから」

また言う彼だった。

「どうですか？それで」

「よくわからないですけど」

いきなりそんなことを言われてはわからなくて当然だった。実際に彼女の目はいぶかしんだままである。しかしそれでもまだ言う裕則だった。

「まあすぐですから」

「すぐなのですね」

「しかも悪いようにはなりません」

裕則はこのことも保障してみせた。

「決して」

「そうですね」

「それでどうでしょうか」

あらためて香里奈に尋ねる。

「魔法をかけていいですか？」

「何かわかりませんがわかりました」

こう返した香里奈だった。

「実習生の。ええと」

「横光です」

今度は自分の名前も名乗った。

「横光裕則です」

「横光さんでしたね。英語の」

「一応社会や国語もできますけれどね」

「それでも実習は英語でしたね」

「はい」

それはその通りだった。しっかりとした顔で頷いてみせる。

「そうです、実習は」

「それではイギリスの魔法でしょうか」

「さて、それはどうでしょうか」

思わせぶりな笑顔を浮かべ今は答えようとしなない。

「それは受けてからののお楽しみということぞ」

「左様ですか。それでは」

「目を閉じればすぐですから」

「すぐですね」

「はい、すぐです」

それは言って保障する。

「今からかけさせてもらいますね」

「わかりました」

香里奈も遂に頷いた。そのうえで目をつぶる。

裕則は素早く化粧道具を一式出してだ。それで彼女の眼鏡を外して化粧を一気に済ませた。髪もさっとセットした。そのうえで言うのだった。

「はい、いいです」

「終わりですか？」

「はい、終わりです」

こう香里奈に話す。

「目を開けて下さい」

「わかりました。それでは」

「ただし」

「ただし？」

「驚いたら駄目ですよ」

香里奈に今告げた言葉はこれだった。

「絶対に」

「どうしてですか？」

「とりあえず約束してくれますか？」

その理由は今はあえて言わないのだった。

「それは」

「わかりました」

香里奈はよくわからないまま頷いた。

「それでは」

「ではどうぞ」

裕則のその言葉に従い目を開ける。するとそこにいたのは。

「えっ……」

「驚きました？」

「あの、この人は」

「ああ、この人はですね」

今香里奈の前にはだ。はっきりとした美人がいた。目ははっきりとしていて顔立ちは全体的に整っている。流麗な目に奇麗にセツトされた髪、メイクは薄いがしっかりしている。そして唇は紅だった。

## 第五章

「誰だと思えますか？」

「こんな人この学校にはいませんけれど」

「いえ、います」

裕則はここでまた言った。

「いますから」

「そうなのですか？」

「はい」

こうしてだった。ふとだ。その美人が消えた。急にだ。

「えっ……」

「実はですね」

目の前に裕則が来た。そうして告げるのだった。

「さっきのは鏡だったんですよ」

「鏡！？それじゃあ」

「言いましたよね。この学校にいる人だって」

「つまりは」

「三島さんですよ」

その声が笑っていた。

「三島さん自身だったんですよ、あの人は」

「そうだったのですか」

「だから魔法をかけたって言いましたよね」

「それでこうして」

「そうです。実は僕メイクアップアーティストのアルバイトをしてい

まして」

香里奈にもこのことを話す。

「そういうことです」

「そうなの。それでなの」

「どうですか？今の感覚は」

「嘘みたいです」  
「こう答える他なかった。」  
「こんなことって」  
「ですがほら、これ」  
「ここでまた鏡を見せる裕則だった。」  
「何よりの証拠ですな」  
「そうなりますけれど」  
「三島さんは今まで自分を地味だとか思ってたました？」  
「はい」  
「思っていたことをありのまま答える。」  
「そうですね」  
「そういうのはすぐに変わるんですよ」  
裕則はその言葉を笑顔にしていた。  
「そういうことなんですよ」  
「そうですね」  
「それでなんですか」  
彼はここでさらに香里奈に話した。  
「学校の後でなんですか」  
「後で？」  
「ちよつと一緒に行きませんか？」  
香里奈に今度言ってきた言葉はこれであった。  
「一緒に。どうですか？」  
「一緒にですか」  
「どうですか、それは」  
軽い調子の言葉だがはつきりと告げていた。  
「嫌ならいいですが」  
「何処に行くんですか、それで」  
裕則の話術のせいだろうか。香里奈は話に乗った。そのうえで聞くのだった。  
「放課後何処に」

「魔法をかける場所ですよ」

声が悪戯っぽく笑っていた。勿論顔でもある。

「そこにです」

「魔法をですか」

「そうですね、そこにです」

ここでもその笑みは変わらない。

「行きますか」

「わかりました」

今回も頷く香里奈だった。

「それじゃあ放課後に」

「そういうことで」

こうしてだった。香里奈は裕則の誘いに乗ってある場所に彼と共に向かった。そしてその場所とはだ。彼女がこれまで来たことのない場所だった。

「あの、ここは」

「こういう場所をはじめですか」

「はい、そうですね」

こう裕則に答える。そこは有名なブティックだった。

## 第六章

その前でだ。香里奈は戸惑いながら裕則に問うのであった。

「ここで一体何を」

「何をつて決まってるじゃないですか」

素っ気無くすらある今の裕則の言葉だった。

「ブティックですよ」

「はい」

「ブティックは服を試着して買う場所ですよ。それしかないじゃないですか」

「それはわかってますけれど」

「けれど？」

「あの、私」

「ああ、お金なら問題ありませんよ」

このことは笑って一蹴した裕則だった。

「それでもメイクアップの技術は確かだ。クライアントも多いんでお客さんには全く困っていません。勿論お金にも困ってませんから」

「お金は私もあります」

それはだと返す香里奈だった。

「ただ」

「ですから。今回も魔法なんですよ」

「今回も？」

「はい、魔法です」

こう話すのだった。

「ですから魔法をかけられたと思ってですね」

「お店の中ですか」

「はい、行きましょう」

また言う彼だった。

「そういうことで」

「魔法ですね」

香里奈はその言葉を裕則に返した。

「魔法なら。そうですね」

「何の気もかけることはありませんから」

「わかりました。それじゃあ」

「中に入りましょう」

こうしてまた裕則に魔法をかけられた香里奈だった。そして次の日。

学校ではだ。生徒も先生達も誰もが驚いていた。

「誰だよ、あれ」

「何だあの美人」

「誰なのよ」

「あんな人いたか!？」

「いないだろ」

長い髪に少し茶色をかけ見事にブローさせてある。顔立ちは非常に整い堂々とした表情である。その目には眼鏡も何も無い。

耳には銀のイヤリング、首には同じ色のネックレス。赤いシャツに黒い上着、そしてかなり短いタイトのミニである。ストッキングは肌色だ。

ハイヒールの音をつかつかとさせているその美女の正体は誰なのか。誰もが考えた。

「ええと、誰なんだろう」

「あんな人見たことないけれど」

「そっだよな」

「一度も」

「本当に誰だ？」

「先生かしら」

生徒の一人がこう言った。

「制服じゃないし」

「先生？誰だよ」

また一人が言った。

「それなら。誰なんだよ」

「あんな先生いないよな」

「ああ、いない」

「あんな綺麗な先生うちの学校にいないぜ」

このことはすぐにわかった。教師の方が生徒より数が少ない。それなら調べるのは簡単なことだった。

「保健の先生でもないしな」

「うちの先生おばちゃんだしな」

「だから違うよな」

「じゃあ本当に誰なんだ？」

彼等はさらに考える。そうしてであった。

「あの人は」

「ええと、学校にいる人なら」

「一体誰なんだ？」

「本当にな」

「いや、待てよ」

ここでまた一人が言った。

## 第七章

「先生の他にも大人の人いるだろ」

「ええと、用務員さんに事務員さんか」

「事務員さんっていつたら誰がいる？」

「太宰さんと芥川さんに」

まずは二人挙げられた。事務員で目立つ二人だ。

「それと。ええと」

「誰だった？」

「誰かいたか？」

「確かうちの学校事務員の人三人だったよな」

「ああ、三人だよ」

「そうだよな」

このことが確かめられる。そうしてであった。

その最後の一人がだ。話されるのだった。

「最後の一人っていつたら」

「誰？」

「誰だったかな」

「三島さんっていなかったか？」

ここでようやくこの名前が出た。

「三島さんっていただろ」

「ああ、そうだよな」

「そつえばいたよな」

「ええと、ってことは？」

「あの美人さんってまさか」

「三島さん！？」

ここだ。やっとここに辿り着いた。

「三島さんって地味だったんじゃないのか？」

「そうだよな」

「もうすつごく地味でな」

「全然目立たない人なのに」

「あの人なんだ？」

「何なんだよ」

こう話してだった。彼等はあらためて香里奈を見た。見れば見る程凄まじい美人である。最早トップモデルか女優か。その域だった。そして美人となればだ。来るものは決まっていた。

「あの、三島さん」

「今度の日曜どうですか？」

「土曜でも」

「よかつたら映画館でも」

「図書館でも」

「八条テーマパークのチケットありますけれど」

生徒も教師も出入りの業者もだ。次から次に彼女に迫ってきた。そうしてそのうえでだ。デートやら何やらの申し込みをするのだった。

これまでとは全く違っていた。まさに一変であった。

しかしだ。香里奈はにこりと笑ってだ。彼等に対して返すのだった。

「折角ですけれど」

「えっ、折角!？」

「折角ってことは」

「つまりは」

「はい、もう相手がいますので  
だからだというのである。

「ですから私はもう」

「相手って誰だ？」

「こんな美人と付き合う相手って」

「そんな幸せ者何処にいるんだよ」

「どの国になんだよ」

「ここにいますよ」

いぶかしむ彼等のところに来たのはだ。裕則だった。彼はここに  
ことした顔で香里奈のところに来てだ。こう彼女に言うのだった。

「学校終わったらスパゲティ食べに行きましょう」

「はい」

香里奈はそのにこやかな顔で裕則の言葉に頷いた。

「それでは学校の後で」

「そうしましょう。二人で」

何と彼であった。彼がその相手であった。そうしてである。  
それを見た面々はだ。驚きを隠せないまま言うのであった。

「何でだよ」

「何で横光先生なんだ？」

「君がどうしてあの美女と？」

「一緒になれたんだ」

「ああ、それは簡単ですよ」

裕則は驚く彼等にも笑顔で話す。

「僕があの人によさに気付いたからですよ」

「それでだって」

「それで？」

「一緒になれたって」

「香里奈さんは凄い美人だって。最初からわかっていましたから」  
それでだというのだ。

「それでなんですよ」

「最初から気付いていたって」

「それでって」

「僕はそれをちょっと掘り起こしただけです」  
自分のことはこれで終わらせたのだった。

「そう、ほんのちよっとだけですよ」

「それであれだけの美人になったって」

「けれど元々美人だったって」

「そうだったのか」  
「それに気付くかどうかで変わるんですよ」  
「こんなことも言うのであった。」  
「それで僕は今あの人と付き合ってる訳です」  
「何か嘘みたいな話だけれど」  
「魔法にかかったみたいなの」  
「そうだよ」  
「はい、魔法ですよ」  
裕則はここでその通りだと述べてみせた。  
「人はちよつとした魔法であつという間に変わるものですから」  
「ううん、何だかよくわからない話だけれど」  
「あんなに地味で目立たなかつた三島さんがね」  
「あそこまで美人になるなんてね」  
「魔法だよ、本当に」  
「はい、じゃあそういうことで」  
彼は彼等にまた言つてだ。そして最後にこう言つのであつた。  
「魔法使いはこれで」  
最後にこう言つてその原石からとびきりの宝石になった彼女のところに行くのである。魔法使いはその見出した宝石を愛するのであつた。

男の子は魔法使い 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8957p/>

---

男の子は魔法使い

2011年1月2日22時10分発行